説教要旨『イエスの身につけた武具』

マタイによる福音書 5 章 38〜42 節

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。」（38〜39 節）とイエスは言われました。「目には目を、歯には歯を」は、同害報復法と呼ばれ、“報復は、受けた傷害と同じ程度にしなければならない”という、無制限な復讐に歯止めをかけるための掟でした。けれどもイエスは、悪人に復讐することそのものを禁じます。それどころか、右の頬を打たれたら左の頬をも向け、下着を取ろうとする者には上着を差し出し、ローマ軍から「一ミリオン」の荷物運びを強要されたら積極的に「二ミリオン（約 3 キロ）」行くようにし、悪意を持って求めたり借りたりするような者には背を向けてはならないと命じるのです。

アメリカの公民権運動を導いたキング牧師は、次のように語りました。「確かに暴力によって、あなたは殺人者を殺すことができるかもしれない。しかし殺人行為そのものを殺すことはできない。暴力によって嘘つきを殺すことができるかもしれない。しかしあなたは真理を確立することはできない。また暴力によってあなたを憎悪する者を殺すことができるかもしれない。しかしあなたは暴力によって憎悪そのものを殺すことはできないのだ。暗闇は暗闇を消すことができない。それができるのは光だけだ」。「目には目を、歯には歯を」という理屈は、当然の報いとして、また被害者以外の者がそのことを非難しづらいという側面も相まって、現代にまで根強く残っています。また、同程度の復讐とは言っても、その物差しは結局のところ私観に依るところが大きく、そこに公平性はありません。こうして、憎しみや暴力は繰り返され、止まるところを知りません。

イエスが「悪人に手向かってはらない…」としたのは、単に悪人の言いなりになることではなく、私達を憎悪や暴力へ誘い出そうとする悪の誘惑に勝利するためであり、本当の平和を実現するための闘い方、「善をもって悪に勝」（ローマ 12:21）つ道をお示しになるためでした。聖書はイエスの闘いとその勝利についてこう証しています。「この方は…ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。…そのお受けになった傷によって、あなた方は癒されました。」（Ⅰペトロ 2：22〜24）。この事実こそが、人間の勝利ではなく、イエス・キリストなる神の勝利を信じる者にとっての矛となり盾となって、私達を滅びへと向かわしめる誘惑から守ります。

（文責：望月達朗牧師）